



あらぬ



もの

川崎ゆきお

「あらぬものですか」

妖怪博士付きの編集者が来ている。

「そうじゃ、あらぬものじゃ」

「あり得ないものですね」

「まあ妖怪も、そのあらぬものだが、それに限らぬ」

「あり得ないことが多いという意味ですか」

「あり得ないことは、あり得ない。だから、それは、そこでストップがかかるだろう」

「そうですねえ。あり得ないのだから、考えなくてもいいのですから」

「ところが、あらぬものは、その境界が曖昧だ」

あり得ないものと、あらぬものとの違いを妖怪博士は語っているようなのだが、これは妖怪博士独自のあらぬ解釈のようだ。

「あらぬものは、想像してしまうということじゃ。そこがあり得ないものよりも緩い。まだ、あり得ないものとは言い切る前の状態じゃ。言葉の意味は同じでも、古い時代の言い回しと、今とでは違う。それゆえ、見えてくる世界も違うのじゃ」

「博士」

「何か」

「今の状態が、すでに分かりません。僕はどこに座っているのでしょうか」

「知らん」

「もう少しシャープをお願いします」

「これも録音しておるのかな」

「はい。取材ですから」

「妖怪は、あらぬものじゃ。あり得ないものではない」

「やはり同じように聞こえます」

「妖怪はあり得てもいいからじゃ」

「でも、いないのでしょ」

「一般的な意味ではな」

「じゃ、一般的ではない意味では、いるかもしれないと」

「そういうことじゃ、問いかけ位置の問題でな」

「そのあたりがややこしいですねえ。博士」

「あらぬものは妖怪に限らぬ。人はあらぬものを思い描きながら生きておる」

「そうなんですか」

「君は今、勤めている出版社の社長にはなれんだろう」

「あり得ません」

「しかし、金があると、なれるぞ。だから、不可能ではない。あり得ないことではない。じゃが、君の中ではあり得んことだろう。他の人にとってはあり得ることかもしれん」

「ああ、それが問いかけ位置によって違うという意味ですか」

「妖怪もそうだ。いると思っている人にはいる。いないと思っている人にはいない。しかし、

まあ、どうでもいいことなので、妖怪はおることにした方が楽しいので、目くじらを立てて否定する必要はない」

「また、位置が分からなくなりました」

「己の立ち位置で決まる」

「いいかげんなものなのですね」

「良い加減という意味じゃ」

「加減するのですか」

「妖怪の場合は、加減が緩い」

「それで、妖怪はあり得ないものではなく、あらぬものなのですか。まだ、区別が付きません」

「そんなもの、付けんでもいい。ニュアンスじゃ、雰囲気じゃ」

「はい」

「あり得ないものは追いかけてくいが、あらぬものは追いかけてやすい。むしろあり得るものよりも、あらぬものの方が追いかけてやすいこともある。つまらぬもの、どうでもいいものほど追いかけてやすい。妖怪もその口じゃ」

「今、この口で噛み砕いて聞いています。あとで聞き直しますが。きっと本来の言葉の意味とは違うような気がします……」

「人を引きつけるもの、それはあらぬもののことが結構多い」

「それはロマンチストの世界ですね」

「まあ、そうかもしれんおう」

「そういえば、ゆるキャラのように、いろいろ地域で、妖怪が出てきてますねえ」

「妖怪は幽霊ではなく、オバケだ。だから、愛嬌がある。ここに何かを託すのもよからうて」

「そうですねえ。あり得ないものとしてなら、駄目ですが、あらぬものとしてなら、あってもいいんですよ」

「そんな感じじゃ」

了